

## 老年期と青年期における死の意味づけの比較研究

### - 死の意味づけ尺度を用いた分析から -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
土居 郁子

本研究では、老年期における死の意識、特に死の意味づけの特徴を明らかにすることを目的とした。そのために、死の意識が異なる青年期との違い、死別経験と自分自身の死の意識との関連を明らかにすることを目的とした。なお、死の意識の分析には石坂(2009)が作成した死の意味づけ尺度を用いた。

研究 Ⅰでは高齢者 118 名と青年 271 名を対象に、基本属性(年齢、性別、死別経験の有無、死別の対象者、死別の経過期間、自分自身の死に対する準備)と死の意味づけ尺度 27 項目で構成される質問紙調査を実施した。研究 Ⅱでは死の意味づけの特徴や、死別経験、自分自身の死の意識との関連について具体的な語りから検討するために、高齢者 5 名と青年 2 名を対象に Life-line Interview Method という今までの人生と将来の人生における重要な出来事について尋ねる構造化面接と、死別経験や死のイメージについて尋ねる半構造化面接を実施した。

その結果、死の意味づけ尺度は、因子分析により「死の有意義さ」「死の忌避」「死による苦難からの解放」「死の無拘泥」「死後の永続性による受容」の 5 因子構造が抽出され、「死の有意義さ」「死による苦難からの解放」「死の無拘泥」「死後の永続性による受容」において、いずれも青年よりも高齢者の得点が有意に高かった。語りからは、高齢者においては死別を経て自分自身の死についての思索を深めることで、「死の無拘泥」「死後の永続性による受容」の意識を獲得し、現在の生活や生き方を捉え直しており、さらに「死による苦難からの解放」の意識から死別の受容を可能にしていると考えられた。青年期においては、死別を経て「死の忌避」の意識が高まり、さらに故人の生きた証を残したいという思いが自分自身の生き方に反映されている。さらに、老年期においては現在の生活を肯定的に捉えることが、将来の生き方や自分自身の死に対する積極的な姿勢や希望を持つことを支えることが示唆された。また、それを可能にするものの一つに家族の存在の重要性が挙げられた。

課題としては、研究 Ⅰで自分自身の死に対する意識を死に対する準備では捉えきれなかったことと、研究 Ⅱで死別の対象者、経過年数、性別による違いの検討が不十分だった点が指摘できる。これらの点をさらに検討することで、老年期の死の意識、とりわけ死の意味づけと関連する要因を明確にすることができると考えられる。